### 環境負荷低減に関する活動

### 事業活動のマテリアルバランス

名古屋大学では、事業活動(教育、研究、医療活動)に伴って発生する環境負荷を把握し、 データを集計・分析して環境負荷低減に努めています。









都市ガス 3,631干㎡

井戸水

616<del>T</del>m



水道水



紙類 262 t



化学物質 150 t



# OUTPUT



CO2排出量 75,889 t-CO<sub>2</sub>



排水量 875<del>T</del>m<sup>3</sup>



-般廃棄物/産業廃棄物 2,576 t / 1,393 t

### エネルギー使用量・CO2排出量

### ■エネルギー使用量

電気使用量について、新たに5棟の建物が稼働したこと 活動の成果が出ていると考えます。 に加え、スーパーコンピューターを更新したことが影響し、 増加したものと考えます。

全体のエネルギー使用量(原油換算)としては、3.5%の 増加となりましたが、施設面積当たりのエネルギー使用量

(エネルギー消費原単位)では、1.6%の減少となり、省エネ

#### ■CO2排出量

エネルギー使用量は3.5%の増加となりましたが、さまざま な省エネルギーへの取組に加え、CO2排出係数の低下により、 CO2排出量は0.8%の増加に抑えられています。









# 国立大学法人名古屋大学 環境報告書2016

(ダイジェスト版)

# 総長メッセージ



名古屋大学では、歴代総長が新しい大学の在り方や社会の要請に沿った教育研究を通じた貢献 について提案をし、リーダーシップをもって大学改革にあたってこられました。21世紀に入ってから 6名のノーベル賞受賞者を輩出したことはもとより、さまざまな教育・研究プログラムの展開により、 最高水準の大学院教育ならびに基礎および応用研究の充実という形で実を結んでまいりました。

私は、総長の引き継ぎにあたりNU MIRAI 2020を策定し、環境報告書と深く関わるテーマとして、 「アジアと学び世界に挑む人材の育成による持続可能な世界の構築」「産官学連携を含む多様な 連携によるイノベーション」「世界水準のキャンパスへの創造的再生」「世界・アジアと連携した男女 松尾 清一 共同参画の推進」などを取り上げています。すでに、アジアサテライトキャンパス、キャンパスマスター プラン、男女共同参画推進事業などが目覚ましい実績を挙げていますが、キャンパス整備と環境負荷

低減への取組は特筆すべきものがあります。中でもサステイナブルキャンパス評価システムにおいて全国大学で唯一の プラチナレートの認定を受けられたことは、キャンパスマスタープランに従って本学のさまざまな教育研究組織と管理機構 が一体となって「世界の誰もが活動の場として選びたくなるキャンパス」を目指し多様な取組を積み上げた成果だと思い ます。今後も、このような学内における連携と、産官学および国際的な連携を活用して、目標の実現に邁進していきます。

環境報告書2016が、名古屋大学を教育研究の場とすることをお考えの若い世代の皆様、名古屋大学による未来に向けた 全世界の持続的発展を支える活動に期待されている方々のご理解のお役に立てることを祈念しています。

# **クローズアップ** 環境報告書2016 表紙作品公募

環境報告書2016の編集にあたり、本学の学生・ 教職員へ向けた環境報告書のPR活動の一環として、 または環境について考えるきっかけとなる期待を込め、 表紙作品を公募しました。初めての試みで、公募した 当初は応募作品が集まるのか不安もありましたが、 多数の素晴らしい作品の応募がありました。選考の 結果、大賞は理学研究科の畔柳早希さん、優秀賞は 文学部の木下優友さん、附属高校の鈴木栞さんの 作品が選ばれ、これまでにない多くの人の気持ちが こもった表紙とすることができました。



受賞者の畔柳さん(写真左)と木下さん(写真右)



受賞者の鈴木さん

#### 受當作品



⚠ 【大賞】 理学研究科 畔柳 早希さん (本誌表紙に掲載)



✔ 【優秀賞】 文学部 木下 優友さん (本誌P7に掲載)



【優秀賞】 附属高校 鈴木 栞さん (本誌裏表紙に掲載)

入賞作品の作品紹介を本誌 2ページ、46ページに掲載して います。

本誌は名古屋大学内の図書館、 公開施設、地域のコミュニティー センターなどでご覧いただくこと ができます。また、施設管理 部ホームページでも公開して おります。

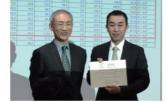
本編URL: http://web-honbu.jimu.nagoya-u.ac.jp/fmd/06other/guideline/e\_rpt.html

# 環境活動に対する学外評価

### サステイナブルキャンパス評価システムでプラチナ認定

名古屋大学は、2016年2月、サステイナブルキャンパス 推進協議会(CAS-Net JAPAN)が実施する「サステイナブル キャンパス評価システム により全国で唯一のプラチナ認定を 取得しました。評価システムは運営、教育・研究、環境、地域 社会の4部門で評価を行います。本学は環境部門で80%、 それ以外の3部門でほぼ満点に近い得点率を獲得しています。 教員や職員が、自らの実態を幅広い視点で把握し、自己評価の 継続により改善のサイクルを確立したという本学のマネジ メントの取組、それに基づく多彩な活動が高く評価を受け ました。





### UN WOMEN「世界の10大学」選出

2015年5月に、国連機関であるUN Womenが主導する [HeForShe] (男性が変革の担い手となって男女共同参画 社会の実現を目指す運動)を推進する世界の10大学に、日本 から唯一、名古屋大学が選出されました。本学の男女共同

参画推進に向けた学内保育園・学童 保育所の設置、女性リーダー育成 プログラムの実施や理系女子学生 を応援する活動など、フロントラン ナーとしてのさまざまな取組が 高い評価を受けています。



学内学童保育所の児童たち



# 学生による環境活動

# 名大祭における環境活動

名大祭では、名大祭本部実行委員会が中心となり、ごみ の分別回収や間伐材割りばしの使用、古本市の開催など、 さまざまな環境活動に取り組んでいます。名大祭を「ただ 楽しんでもらう場しで終わらせるのではなく、来場者に環境 について考え、行動するきっかけを提供する場にしたい





ND「ズみステーションノ

古木市

### ボート部員による庄内川ごみ拾い

名古屋大学ボート部は、名古屋工業大学や南山大学などの ボート部と協力し、年に1回庁内川の船台付近の掃除を行って います。地域の共有スペースである庄内川を練習場所と して使わせてもらっているため、地域の方々への感謝の意も 込めて活動しています。普段からも気を配り、庄内川の美化 に心掛けています。



活動終了後の集合写真

## 学生環境サークル「Song Of Earth」の活動

「Song Of Earth」は、学生自身でできる環境活動は何かを 考え、身近な環境改善を図ると同時に、環境問題に対する 理解を深める活動をしています。東山キャンパス内の花植えを 行う「花いっぱい運動」、下宿用品のリユース市の開催など、 キャンパスで活動する誰もが心地よく、うれしくなる環境 活動に取り組んでいます。





だいっぱい 運動

# 学生サークル「なごねこ」の活動

「なごねこ」は、キャンパス内に生息する野良猫を適正に 管理すべき「地域猫」として、猫の不妊手術、えさやりを通した 個体管理、里親探しなどを行っています。

サークルの活動が地元の新聞にも取り上げられたり、地域 の方々から多くの賛同や支援をいただくなど、学内外の皆様 に支えられながら活動を続けています。





えさやりを通した個体管理

里親宅で元気に暮らす猫

# 環境に関する教育・研究

## キャンパスを対象とした実習

工学部環境土木・建築学科では、2年生後期に「環境土木 工学実習」を開講しています。東山キャンパスを対象として、 「防災・減災 | 「エコキャンパス | 「安全・快適な移動 | 「景観 | の4つをテーマとし、よりよいキャンパスを実現するため の具体的なプロジェクトを提案するもので、学生ならではの 画期的で斬新なものや、非常に有用な情報を提供するもの が多くありました。普段、自らが生活をするキャンパスを 見つめ直すことができたと、学生からは非常に好評を得て います。(本編では学生自身が実際に取り組んだプロジェ クトについて紹介しています)



ワークショップによる解題抽出



キャンパス内の現地調査

### 大気中物質の動きの研究から、よりよい未来を目指す

地球温暖化と放射能をテーマとし、物質の動きの研究 から環境問題に取り組む工学部工学研究科エネルギー 環境工学の山澤弘実教授の研究室を学生が訪ね、その 研究内容についてインタビューを行いました。

人口も少なくて産業活動も小さかった頃は、環境中に 汚染物質を出しても環境がなんとか始末してくれていま した。ところが今の人口と産業の規模で人間活動を行った 結果、温暖化や環境汚染を引き起こしてしまいました。 どこまで地球に対して人間活動をやってもいいのか、きちん と判断しなくてはいけません。そのために、人間活動に よって温暖化物質や放射能が環境に及ぼす影響をあら かじめ予測できる技術をもちたいと考えています。



写真中央が川澤教授

# 社会的責任・環境コミュニケーション

### 「木づかい」産業における地域活性化

2015年11月、大学院生命農学研究科の竹中千里教授、 山崎真理子准教授などが中心となり「『木づかい』産業に おける男女共同参画推進による地域活性化 一中部地域を モデルとしたワークショップー」が開催されました。「木づかい」 産業とは、持続的に生産可能な資源「木材」の生産から 消費までの一連の産業(林業、建築業など)を指し、女性 従事者が少ないイメージがありますが、実際には多くの 女性が活躍しています。産業界、官公庁で現役で活躍して いる女性から、現在の仕事の魅力、家庭との両立、社内での 環境づくりについて事例紹介があり、参加者からは驚きと 期待の声が上がりました。多様な世代、分野の方が参加し、 非常に闊達な交流会となりました。立場を越えて環境を 生かした地域づくりを一緒に考え、これからの協働につな げるこのネットワークが、名古屋を中心に今後大きく広がって いくことを期待しています。



ワークショップの様子

### 卒業生の活躍

名古屋大学大学院国際開発研究科の卒業生であり、現在、 IIED (国際環境開発研究所)で環境保全に関わる業務に従事 するイサム・ヤシン・モハメドさんは、エコノミストとして、 世界中の人々に環境保護の経済的な重要性を訴えています。

名古屋大学在籍中、愛知県犬山市にある八曽湿地 保護のボランティア活動に参加したことをきっかけに、 環境を守るのに必要な投資がされていないのではないか と感じたことから、環境保全について経済的側面から 考えるようになりました。人々が自然資源の価値を十分に 評価できていないことに問題があると考え、環境の経済 的価値を評価する方法を確立しようと考えました。環境 資源の価値を的確に伝えれば、環境保護への投資が いかに重要であるか理解されやすくなります。今では 自然を貴重な資産とみなし、環境保全への投資に賛同 する政府も増えてきています。



イサム・ヤシン・モハメドさん



きっかけとなった八曽湿地 (撮影者:里山学研究所 林 進)